

現代中学生における「心の居場所」の機能と学級風土・家族機能との関連

中里 清子

本論文では、「居場所」をほっとしてありのままでいられる場所としての「消極的居場所（避難場所・安定志向）」と、ワクワクして楽しい、やる気が出てくる場所としての「積極的居場所（自己実現・興奮志向）」と定義した。また、中学生の日常生活の場面について「単独でいるところ」か「複数の人と共有しているところ」か、「単独行為」か「コミュニケーション行為」かに分類し研究の視点とした。研究Ⅰでは「現代中学生の『心の居場所』の機能の諸側面について実態を捉えること」を目的とし、研究Ⅱでは「現代中学生の学級・家庭における諸要因と『心の居場所』との関連性を検討すること」を目的とした。その結果、ひとりでいるとき、男子は単独行為に、女子は誰かとのコミュニケーション行為に居場所感を持つ傾向があった。また中学生は、ひとりでいる場所では単独行為・コミュニケーション行為ともに同等の居場所感を持っており、ひとりでいる場所をまだ自己実現的に利用できていない傾向があることが示唆された。学級の親密性においても家族機能の凝集性においても、周囲の人との『共行動』が関連しており、周囲の人との「つながり」が現代中学生の「心の居場所」を語る際にキーワードとなってくるように思われた。

自己評価と他者評価の認知のズレと学校適応感との関連

西本 万希子

本研究では、学校不適応感に影響する多くの要因のうちから、中学生時期の発達に重要な対人関係を取り上げ、不適応状態の『グレイゾーン』と呼ばれる生徒の、「自己評価」と「他者評価の認知」とのズレと学校適応感との関係を探り、予防的援助について検討した。

「自己評価」と「他者評価の認知」のズレの方向性と学校適応感尺度との関係を見たところ、対人関係の中でややわらかさを表す項目の《柔軟性》、信頼に足る人と思われるような特徴の《信頼感》、力強さを表す項目の《強さ》で有意差が見られ、いずれも「自己評価優位群」よりも、「他者評価の認知優位群」の方が学校適応感が高いことが分かった。

分析結果より、本研究では、不適応状態の『グレイゾーン』の生徒の特徴を「自己評価、他者評価の認知が共に低く、その中でも自己評価優位群である」とした。学校での予防的な関わりとして、生徒に一人一役を与え成長を図ること、教師が授業時間以外にも生徒と接し、理解を深めること、スクールカウンセラーが相談室のPRを徹底し、対人関係を学ぶグループワークを行う事などが考えられる。そして、グレイゾーンの生徒たちに対して校内の異なる役割を持つ教職員が密に連携を取って関わるのが最も重要であると言える。